

ミニシアターまる
「金のたい」

講評 河瀬仁誌

(Kyoto 演劇フェスティバル実行委員／劇団 ZTON)

『金のたい』は、グリム童話の『漁師とおかみ』を日本の昔物語として再構築した物語であった。そして、子ども向けの物語としてよくできた人形劇作品であると感じる。中でも、物語の冒頭では無欲に見えた老婆が、願いをかなえてくれる金のたいに夢中になり、願いをかなえるよう懇願する姿は、同じ老婆の人形であるのにもかかわらず、形相が全く違っているかのように見えた。(人形をチェンジしているのかもしれないが) 同じ人形でここまでの変化がつけられるのはすばらしい演技力である。また、欲が肥大化した結果、因果応報として手に入れたものがすべてなくなり、元の貧しい生活に戻るというラストは、道徳的な部分と児童向けの演劇のバランスが取られていたように思う。

ただ、消化不良な点がいくつかある。まず、金のたいが住む海の色の変化だ。ストーリー冒頭では海の色は薄い水色であるが、老婆が欲を出し、願いが大きくなればなるほど海の色はどんどん赤色に、薄気味悪く変わっていく。これはなぜか。また、物語の最後で金の嵐が起こり、おばあさんが手に入れたすべてが失われてしまう点。オリジナルとなるグリム童話では、この二点がしっかり連動している。海が荒れていき大きな嵐が起こる。ヒラメが元に戻ってしまう形でおさまっている。しかし、金のたいはこれら二つのセンテンスが観客の見やすいかたちで繋がっておらず、もう一工夫欲しいところだ。

また、単純な疑問として、老人と老婆の関係である。老婆の職業は紹介されなかったが、城に住みたいと思うほど欲深い老婆が、欲のない老人と何十年も一緒に暮らせるものなのだろうか。また、老人は舟を使って沖に出る必要があったのか、物語に舟は絡んでおらず、舟を登場させることが必要だったのかなど。オリジナルから日本昔話に置き換える際にこぼれ落ちた設定のあらが、児童向け演劇の道徳心をかき立てる衝動を薄めている。

転換中の動作ももう少し考えたいところだ。場転中も観客には見えている。セットの登場のさせ方でも、城は地面から飛び出てきたほうが面白かっただろうし、水の布をケコミに被せる際は波打つような印象を与えて置いたほうがいいだろう。ほかにも、音響は流すMEにバリエーションが少なく、本当にただの場転になってしまっている。「願いをかなえてもらって早く帰りたい」という気持ちや、「帰るのは嫌だな」という気持ちも、音楽一つで丁寧に拾えるはずである。

細かい点をもっと丁寧に紡げば、もっとよい演劇になるように思う。